

元 4854 59

永320°
おほしき 足つみ 見受けし
虎に翼をつけて飛んだコノト

4.849^p

紀下390^p

近江（大宰府）の動揺

この頃、近江（大宰府）の朝廷に、事の重大さが知れわたった。

猛虎とおおぼしき大皇弟（天智上皇の弟、大海人皇子）が東国に入った、と聞かされて群臣はみな恐れおののき、京中が大騒ぎになった。

ある者は遁れて大海人皇子が立ちあがった。東国に入ろうとし、ある者は退いて山沢に逃げ隠れようとした。

このころ、天武紀元年六月二十六日条には、是の時に、近江朝、大皇弟東国に入れたまふことを聞き、其の群臣悉に驚いて、京の内震動。或いは退きて山沢に隠れむとす。とある。

伊勢へ入ったというのに、一体どうして、

ある者は遁れて東国に入ろうとしたのだらうか

(12)

4.850^P

信望 1163^P
信望 142^P
信望 2344^P
信望 4849^P

信望 512^P おやく不足議など
奇妙 4843^P

• だちうか。命知らずにも、虎に向かつて遁水

てゆくようなものである。

• ヘソ小ほどまでに人々は動員していった。

という情況を示すものであろうか。

• そうかも知れないが、それでもやはり奇異な

感があるのは否めない。

• 近江（大宰府）の人々は、

大隅人皇子の信望および力量、

大友天皇の信望および力量、

の双方を比較してみるとき、その差があまり

にも歴然としてゐるので、恐れおののき、

• ある者は、遁水して天智上皇が統治しておら

れる口東国（近畿地方）へ入ろうとし、

• ある者は、退いて山沢に逃げかくれようと

した、

ということを意味してゐるのかも知れない。

*

やま 4831P 4行
(大) 4831P 4行

紀下390

紀下395

三長統
言馬本
紀下396P 3行
吹員 4858P
4889P

紀下396P
4852P

前頁

また大友天皇は、穂積臣百足・弟五百枝・
物部首日向を大倭の京へお遣わしにな

った。

大倭国（肥後国）の武器や兵を、近江（大
宰府）に調達させる為であつたようである。

もつとも後文によると百足は二月二十九日に
大倭国タクマが原の（小墾田の兵庫に居る

時、大倭国タクマが原の（小墾田の兵庫に居る

兄弟の弟の方、吹員は小吹員・男吹員

とも、（う）に呼び出され、飛鳥寺（法興寺）

において斬殺される。

いかに、方、五百枝と日向は、捕えられ、後
に、大倭人皇子の方、軍中に置

かれたというや

4851未
201-83

次頁
から

天守
改訂

改訂

改訂

前頁

さらには大友天皇は、佐伯連男を筑紫大宰栗隈王のところにへかせ、樟使主磐手を吉備国中当摩公広嶋のところにへお遣わしになった。この時、大友天皇は男と磐手とにこう言われた。筑紫大宰の栗隈王と、吉備国守の当摩公広嶋とは、もともと大皇弟（大海人皇子）に従っていた臣達だ。そむくことがあるかも知れぬ。もし命令に服従しない様子が見えたら、即座に殺せし。男は筑紫大宰栗隈王のところにへ、そして磐手は吉備国守当摩公広嶋の居所へと向かった。破（長豊海峡）の東の吉備国に居たのか、一ー一ーいれとも、たまたま大宰府に来ていたのか詳らかでないが、この物語では、吉備国守当摩公広嶋は、関門海峡の東の吉備国に居たのではなく、大宰府に居たので

主館 580

詔勅 下392 1244

4.853^{P-2/2}

次頁から

あうう ✓

と考えてみた。

・是に、^{いはて}磐手は、^{きびのくろのかみたぎまのきみひろいま}吉備国守当摩公^{きよかん}広島の居館

へ着くと、^{おいてのふみ}符^{はふん}（命令の文書）を^{てわた}手渡したその

日に、^{はふん}（壬申乱初期における、全く無防

備な）^{かたな}広島をだまして、刀をはずさせ、刀を

抜いて殺した。

・大友天皇の詔勅である^{おいてのふみ}符^はを^{てわた}手渡す時、

「刀を帯びたままでは無礼である」

と、刀をはずさせ、刀を抜いて殺したの

であううか。（「日本書紀」(F) 日本古典文学

大系、岩波書店、三九二頁、注四四八符）参

照）^{いか}磐手の名は、^{トル}その後、日本書紀

に見えない。

紀下392^P

4.854^P

井上29^P

4月27日(金)

紀下391^P5F

前頁

一方、男は、筑紫大宰栗隈王のところへ
栗隈王は、符を受け取ると、
筑紫国は、もともと、
とを任務としております。城を高くし、堀を
深くし、海に向かって守つてゐるのには、国内
の賊に対するためではありません。いま御命
令に従つて軍勢を發したなら、国の備えはな
くなります。そのようなとき、
件がおこれば、たちまち国家は滅んでしま
ましよう。そうなら、
てみたところ、
りますまい。殊して私は謀反しようと考え
いるのではありません。容易に軍兵を動かさ
ないのは、このような理由からなのですし
と答へた。

4,855^p

ヒリはツ7
紀下392
江5

たちばなのもろえ 乙1379^p
佩く 乙 希ひる

このとき、栗隈王の二人の子、三野王（橋
諸兄の父）と武家王とは、剣を佩いて父のそ
ばに立ち、退こうとできなかった。
男は、剣をしっかりと握りしめて進み出よ
うとしたが、あべにべに殺されるのを恐れ、
任務を果たさず、空しく還った。

米

H9.5.1
H5.10.24(日)古
→ (こ)

小林 208^p
昨 さく、くらう
ま、かむ
4行

陸 (1043) 228^p
昨 1043 202^p
4行

紀下 387^p
未行 4,856^p

4867^p 解釈

紀下 392^p

4852^p

二人の口吹負
馬来田と弟吹負の想いついて述べる。
天武紀元年六月二十六日条の末尾に、こう
記されている。
是の時に当りて、大伴連馬来田・弟吹負
並に時の否を見て、病を称して大倭
の家に退りぬ。然して其の登嗣位とむは、必
ず吉野に居します大皇弟(大海人皇子)なら
むといふことを知れり。是を以て、六月二
十四日に馬来田、先づ天皇(大海人皇子)
名を一時に立てて、唯し吹負のみ留りて謂はく、
ち一に族及び諸の豪傑を招きて、僅に數十
人を得つ。
次のような意味なのであろう。
「昨子の子である」馬来田と弟吹負は、
大海人皇子が出家した頃のことであらうか
時勢

4852^p
8.9行

・紀下392¹²注12
・日本書紀128^P
平岡

御行紀下418^P 新羅紀下229^P
毛徳 311^P 21^P

4,857^{P1/2} 大伴針紀下64^P
64^P 128^P 202^P とて子が母かるる

市4867^P 馬鞍 紀下387^P 新. 392^P 11^P 行

か思わくなくいのを見て病氣だといつわ
り大倭国（肥後国）の家へ退いた。
時に、大海人皇子（あまのみこと）の
馬来田（まぐた）が先ず大海人皇子の一行に
た。唯し弟の吹負（ふけひ）は、大倭国（肥後国）に留
り、一氣に名を挙げざる機会をうかがった。
つまり、
兄の馬来田（まぐた）は、大海人皇子に従って東国
（豊国）へ赴いたが、弟の吹負（ふけひ）は、大
倭国（肥後国）に留まった。
と解釈してみたい。（第一巻末尾の年表、六
七二年において既述）
＊

長使紀下311⁰2行

前2頁194

日本史評 128⁸

紀F59^p 299 紀T18^p 未299 文件資料大綱

継体朝頃に活躍した大連大伴金村には、
 (昨子)・磐・狭手房などの子があつた。
 そして、昨子には今日に名を残す次
 の三人の男の子がいた。
 (1) 長徳
 孝徳紀大化五年(六四九)四月条に、
 「小紫大伴長徳連(字は馬飼)」に、大紫を
 授けて、右大臣とす
 とあり、大伴氏の本家筋に当る。
 * また、長徳は、追つて述べる「御行」
 の父である。(「日本書紀」(下)日本古典文学
 大系、岩波書店、五九二頁、補注二九一―二
 「日本史辞典」東京創元社、大伴氏へ参
 照)
 (2) 馬来田
 天武紀元年六月二十四日条、同六月二十六
 日条に、馬来田の名があるものの下
 の活躍ぶりについて、は全く記されてない。
 一かし、天武紀十二年六月三日条に、

H9. 5. 1
H5. 10. 25 (A) ⑤
7

4.858 P-2/2

紀下392² 12
続紀⑤-141P
続紀⑤-45³ 397

記すれ²
④4852⁷

紀下392² ④4813⁷ 2行
12 事あるさ

れ以外のことについで、あえて述べなかつたことを思われる。

記され

(3) 吹負^ひ 吹負^ひ

吹負^ひは、時に男吹負^ひとも、小吹^ひ

負^ひとも表記されてゐる。

天武紀十二年八月条に「男吹負^ひは卒^ひって大

錦中位を贈ら小^ひとあり、続紀、光仁天皇

の宝龜八年（七七七）八月条に「飛鳥朝^ひの常

道頭贈大錦中少吹負^ひとある。

注：小でなく少です

なお、「男^を」は接頭語である。そして「小^を

には「年若い」の意がある。

*

述入^ひ 前頁20行

前頁17行書き33

記事

① 4857-7/2 ② 248 3年
1151 吹負は御所の叔父

記事 ① 4859P

「高市の御行」
新ヤリ - 423頁上・下
③ 4885/8年

うし、
か、
さて、話は少々ややこしくなるが、
大倭国（肥後国）の吹負ふけひのほか、
後述する理由によつて、倭国（大和国）
にもう一人の吹負ふけひがいた。
よう、思われる。
なお、この物語では、二人の吹負ふけひを区
別する為、
大倭国（肥後国）の吹負ふけひを、吹負ふけひと
男吹負おとふけひと、小吹負こふけひと
倭国（大和国）の吹負ふけひを、吹負ふけひと
市の御行みこうと記すことにしたい。
それでは、倭国（大和国）の吹負ふけひ（高たけ）
市の御行みこうとは、一体、何者なのだろうか。
定かでないが、このもう一人の吹負ふけひ（高たけ）
市の御行みこうとは、右大臣大伴長徳連の子
大伴連御行みゆき（高市大卿ともいう）のこと
であらう、と考えてみた。
大伴連御行みゆき（高市大卿）は、日本書紀の八壬
申しんの記事中には一切出てこないが、
うし、
か、
さて、
大倭国（肥後国）の吹負ふけひのほか、
後述する理由によつて、倭国（大和国）
にもう一人の吹負ふけひがいた。
よう、思われる。
なお、この物語では、二人の吹負ふけひを区
別する為、
大倭国（肥後国）の吹負ふけひを、吹負ふけひと
男吹負おとふけひと、小吹負こふけひと
倭国（大和国）の吹負ふけひを、吹負ふけひと
市の御行みこうと記すことにしたい。
それでは、倭国（大和国）の吹負ふけひ（高たけ）
市の御行みこうとは、一体、何者なのだろうか。
定かでないが、このもう一人の吹負ふけひ（高たけ）
市の御行みこうとは、右大臣大伴長徳連の子
大伴連御行みゆき（高市大卿ともいう）のこと
であらう、と考えてみた。
大伴連御行みゆき（高市大卿）は、日本書紀の八壬
申しんの記事中には一切出てこないが、

續紀(9) 1-33^p
續紀(10) 1-18^p
→ H5. 10. 25 (土) ④

④ 4956^p

紀下 531^p

4.860^p

紀下 493^p 2行

紀下 461^p 1行
" 592

紀下 418^p 4行
④ 4845^p 1行
④ 4849^p 5行

ここに参考迄に述べると、大伴御行おほとものみゆきについて、次のような記載が見られる。

● 天武紀四年三月二日条に、
栗隈王を兵政官長とす。小錦上大伴連御行を大輔たいふ(ハ次官)とす。

とある。

● 天武十三年十二月二日に、大伴連ら五十氏が、
宿禰すくねの姓を賜たまわった。(紀)

● 大伴氏の本家筋に当る大伴連御行が、宿禰姓を賜たまわったのであろう。

● 持統二年十一月十一日、天武天皇の葬送の際、大伴宿禰御行みゆきらが誅ころされた。(紀)

● 持統八年正月二日、大伴宿禰御行は氏上となつた。(紀)

● 持統十年十月十七日、大伴宿禰御行は正広肆大納言しやうしだいなのんぎとして資人つかひひと(舍人とわり)を仮賜かりたまさ小た。

(紀)

● 続日本紀、文武天皇の大室元年(七〇一)正月十五日条に、
大納言正広参大伴宿禰御行みゆき薨おこす。帝、甚だ悼惜たうせきし。直広肆ちきし榎井朝臣えのみのあそみ倭麻呂やまろらを遣し

万④-375

百研
④-20

1762
長統 ④4859 4861P

78かど
長統 ④4859 4861P

645
5 649
10本中 128

11. 498 301
本長 1-19
12. 468 41
長統 1-33頁 長統 とある

て喪事を監護せしむ。直広を藤原朝臣不比等
に等し、第に就きて詔を宣べしめ。正広
武・右大臣を贈る。御行は難波朝の右大臣大
紫長徳の子なり。欽明朝に任那政策で失脚して大
伴氏は、蘇我本宗の滅亡を機に、孝徳大化五年（六四
九）大伴長徳連が右大臣となり、壬申乱時に
は、馬来田・吹負らが大海人皇子方で活躍し
て、大伴氏の勢力をもちかえした。（「日本
史辞典」東京創元社「大伴氏」参照）
氏は、その後律令国家の忠実な官僚として仕
え、その間に大伴連御行は、一つの歌を作った。
●萬葉集に、「壬申の年の乱の平定しぬる
以後の歌二首」があり、そのうちの一首（万
卷十九・四二六〇）が大伴連御行の作である。
大君は神に坐せば、赤駒の
匍匐ふ田井を都となしつ

④ 4956¹

4.862^P

④ 375^P
378

④ 4956¹

右の一首は、大將軍贈右大臣大伴卿作れ

とある。
（第一卷末尾の年表、最末尾に掲載）

右大臣の位を贈うれた大將軍大伴卿とは、

大伴連御行みゆきのことである。

又、万巻四一六四九の左注に記されてい

る。高市大卿たけちを、大伴連御行みゆきとする説が

ある。（「万葉集」日本古典文学大系、岩波

書店、万四一六四九の注記、同万十九一四二

六一の注記。「日本書紀」日本古典文学大

系、岩波書店、五九二頁、補注二九十一二参

照

とすは、大伴連御行みゆきは、高市大卿たけち

であり、又大將軍みゆきであつたということに

なる。

あるいは、

（壬申乱の時、倭国（大和国）の將軍

とて多大の活躍をした大伴連御行みゆきは、

軍吹負（高市たけちの御行）は、その功によ

つて、壬申乱後大將軍とされた

49.5.1
45.10.26 (水) ⑤
→

4863^P

万4-375^P
⑤ 3818^P

のかも知れない。

■なお大將軍は、戦乱の際、出征軍の長として任命さし長官であり、大軍の場合に將軍の上に置く。征夷大將軍・征夷人々大將軍など

大伴家の人々がいばいばに任じられた。①

(万葉集) 日本古典文学大系、岩波書店、万

卷十九ー四二六〇の注記参照)

■ともあれ、この物語では、

△大伴連御行(高市大卿)は、壬申乱のとき

大きな武勲をあげたので、乱後に大將軍とされた。

■そこで、万卷十九ー四二六〇の左注に、

大將軍贈右大臣大伴卿と記されたのである。

ろう

と解してみたい。

＊

■それでは、三日後のことながら、天

武紀元年六月二十九日条に注釈を加えて見て

みることにしよう。

出来事

天

武紀元年六月二十九日条に注釈を加えて見て

みることにしよう。

「ところで」 ④4842P
④4890P

同文
④249P

4,864P

紀下62¹尾8
④4886P ④4885P 紀下395¹
こと

概略、次のように解釈してみた。

「大伴連吹負（男吹負）は

日おれは、詐つて日高市の御行

名的に書けば、日高市皇子と
となのること

する

と言った。

そして、吹負は、秦造熊（秦氏は
南朝鮮から渡来した弓月君の子孫と伝

人の雄族で、中国系と称した）に、

人（雄族で、中国系と称した）に、

ん（雄族で、中国系と称した）に、

てこう叫ばせた。

タケ千ノミコが、不破の方からやつてき

た。たくさんの兵達が集つて、

帰化人である秦造熊の叫び声を聞いた敵兵

達は、

高市皇子が、軍勢を引きつ小

ら駆け向かつてきた

と思い、——逃げ散ってしまった

という次第であつたらうか。

「ところで」ただ単に、

高市皇子が来た

H9.5.1
H5.10.28(中)⑤
7

たいきよえ
大挙 1331^P

とてとく
独特 1595^P
4.865^P

4885^P 1572

おうれお
恐多い 304^P
畏多い

と叫ばせ敵軍を欺くだけなら、あえて帰化
人を要む。フンドラさせ下日本人に見せか
けて絶叫させる必要はない。
恐らく、真の口高市皇子と詐るのは畏多
いので、大伴連坂負(男坂負)は、
本家筋の長徳の子口高市大卿と、つまり口御
行と詐ることにし、帰化人の秦造態にフン
ドシをさせ、日本人と見分けがつかないよう
にし、トートまた敵・味方の区別もできないよう
にいて、
高市の御行が、不破の方からやってきた。
たくさん兵が従っている。大声で
と叫ばせたのであろう。
帰化人独特の抑揚で叫ぶ秦造態の緊迫した声
を聞いた敵兵達は、まさか、高市の御行のこ
とであらうなどとは思ってもせず、てっきり、
高市皇子の軍勢が、不破から大挙して襲
ってきた。
と思ひ込み、一目散に逃げたように想像され
る。

*

版 18行
逃げた

ミヤス 523¹
偽言 1つわりの詩、うけ
梓根 860¹ ④ 480¹

ミヤス 1372¹
偽言 636¹

ミヤス 4866¹

ミヤス 1630¹
偽言 816¹

ミヤス 816¹

と記述し、高市大卿（御行）は、吹負である。

この偽言を採扱することとしたのであろう。
つまり、日本書紀の筆者達は、躊躇せず、

後代の読者達から決して真実を悟られな
いようにならねばならぬと、

日本書紀の編纂に携わった者達は、壬申乱の
後、これを述記に当り、

吹負（男吹負）が、自分とは、タケチノ
ミコウ（高市の御行）である、と公言し

と信じていた。（「広辞苑」へ「言霊」参照）
言霊の幸ひ、（我國のこと）

さて、往古の人々は、
「言霊」に宿っている不思議な霊
威の力がはたらい、言葉通りの事象がも
たらされる。

H5, 10, 29 (金) 午
7

#上 下 295^r

4,867^p

③ 4856^r

④ 4856^r

なるほど

のところは分らない

■そこでこの物語においては、先の天武紀

元年六月二十六日条末尾の、

「是の時に當りて、大伴連馬来田[○]弟[○]吹

負[○]並に時の否を見て、病を称して、[○]倭の

家に退りぬ。云々[○]

という記事き、次のように読み取つてみた

■大伴車馬来田と、弟(男吹負)と、吹負(高

市の御行)は、並に、時勢の思わくなく、いのき

見て、病氣だといつわり、大倭国(肥後国)

および倭国(大和国)の家に退いた。

・三人は、

「皇位におつきになるべきは、大皇弟(大

海人皇子)でなければならぬ」

と思つたのだつた。

・大海人皇子挙兵の時、馬来田がまず大海人

皇子に従つた。

・しかし、弟(男吹負)は、大倭国(肥後国)

に留り、一氣に名を挙げ、機会をうかがつ

た。

一方、倭国(大和国)に留つてゐる吹負(高

桑 紀下390'10行 6月26日 4835 5057
392' 2行

紀下393' 宇治谷下234' 井上下295'

ふたみ 地行 雨子 1375' 4.869' 1315'

2261' 地震 地勢 陸用で 政府に 利用 他

野上の行宮

六月二十七日

六月二十七日、高市皇子は、使を桑名郡家（中津）においでになる父大海人皇子のものと違し、

御在所から遠く離れておりますと、軍の指揮をとるのに不便です。どうか近い處へおい

ていただきたいたいと申し上げた。そこで大海人皇子は、妃菟野皇女を残して

その日のうちに不破（長豊海峡の南岸のこと）であらうへお入りになった。

なお、豊前国中津を中心とした地形を見てみると、

①英彦山（一ニ〇〇ト）から国東半島の両子山（七二一ト）へ至るまで、山々が手を伸し

抱きかかえるかのようになり、状に連らなっており、北には周防灘が広がる。

②さらに、近江（大津府）と東国（近畿地方）重要拠点である長豊海峡（関門海峡）からは

中津平野を

とき結ぶ

井上F2951
宇治谷下234
4883P
文書館 地名所 1561
4973P 406P 143P

4.870P - 1/3

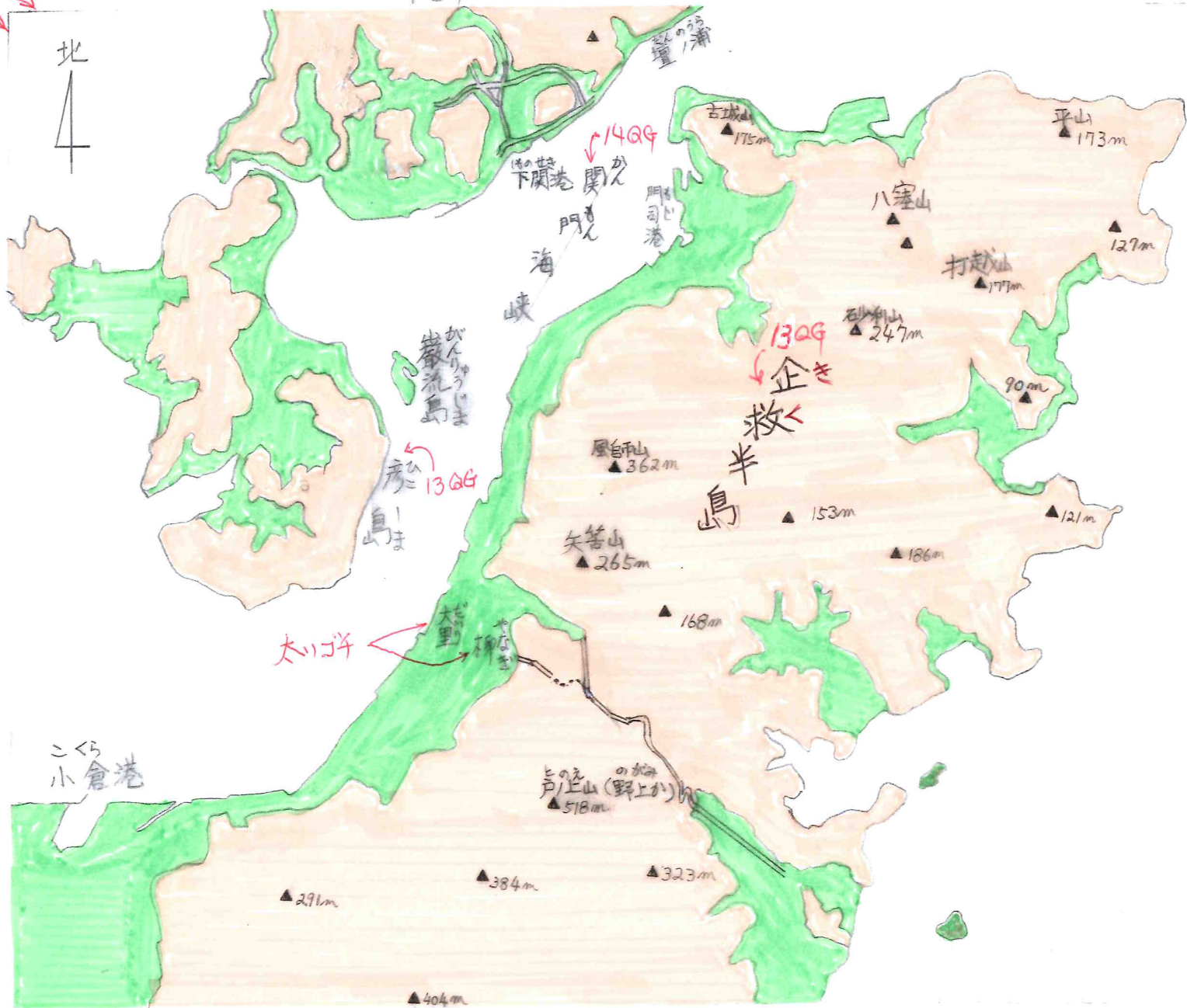
高等地図 28P
そこで 前 10分
4876P
15分

遠く東南に隔たつていて、願つてもない自然
の要害の地となつてゐる
といふことが分かる
大海人皇子は、
へこの地へ中津へなら、妃らを留めてお
りても安んじた
と思われただのであろう。
桑名は、大和国の都から加太越えで東国へ行
くに、近江国（滋賀県）から鈴鹿峠
（三五七）越えで東国へ行くにしても、
どちらにしても街道筋にあたるわけだか
ら、それほど安全だとはいえない
大海人皇子が不破の郡家へ不明。文字関係
たりであらうかに到る頃、尾張国に相当
する周防国の司守（小）子部連鉏鉤が、二万
の軍兵を率いて帰属した。
大海人皇子は、お喜びになり、鉏鉤をほめ
その軍兵を分けて各方面の道の守備に配置
す、水たゞ以下
第515回
写真図版
757
参考

4870^P-2/3

杓腰

- ・ カラー
- ・ トレースにて下さい。
- ・ 新・やま物語山(2)-15頁
を参照下さい。
- ・ 右頁上半分
- ・ 限度一杯はみ出し
掲載下さい。
- ・ 出来るだけ大きい
ゴキにて下さい。
14QG・13QG以外は、
12QGにて下さい。



14QG 第515図 関門海峡近傍図

あ 4086^P-3 金馬山
か 4125^P-2 高安山

ヨコトル

ヨコトル

4870^P-3/3

ヨコトル もトル

・左頁上粉
左右に限定一杯
はみ出に掲載
下さい。

・出来るだけ
明るくおいて
下さい。



← 海の中の白点をトル

13QG

14QG

写真図版 757 関門海峡 (手前は下関港、対岸は門司港)

『世界大百科事典』(6) 平凡社、1972年4月25日初版発行、1978年印刷、関門海峡参照。

- ・カラー
- ・右頁の上方、
- ・上・左右に、
- 大きくはみ出して
- 掲載下さい。

背景をきれいにして下さい。 4.871^P-2/5

おまじない
文字をトル (まわりの色に合わせて下さい)

録画マ



1409 写真図版 758 柳御所

やなぎごほ

・カラー
 ・板下方の右側に
 大まかにはみ出して掲載下さい。
 ↓

カラー
 ↓

入札に下さい
 北



4.871^P - 3/5

114
 黒点とケトル

頁の中心より右へ

1404
 第516図 柳御所近傍図

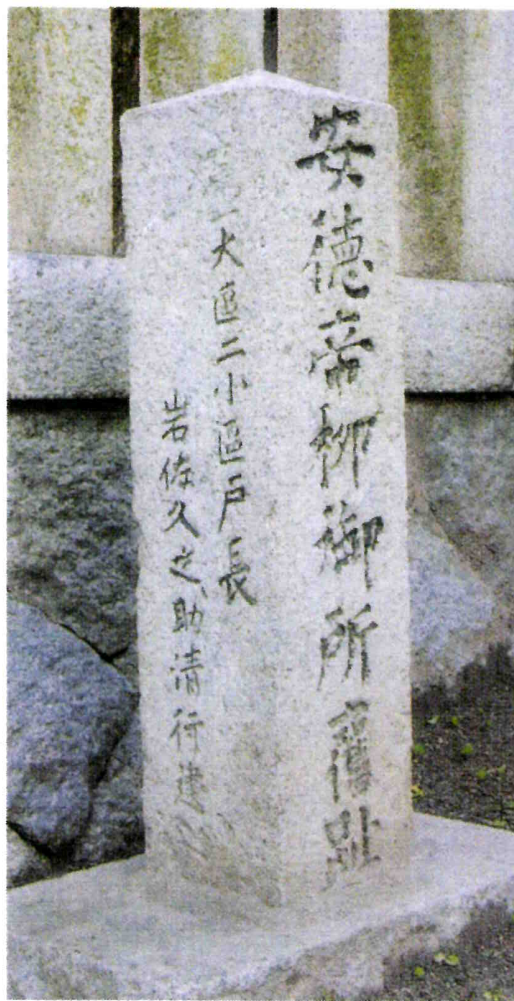
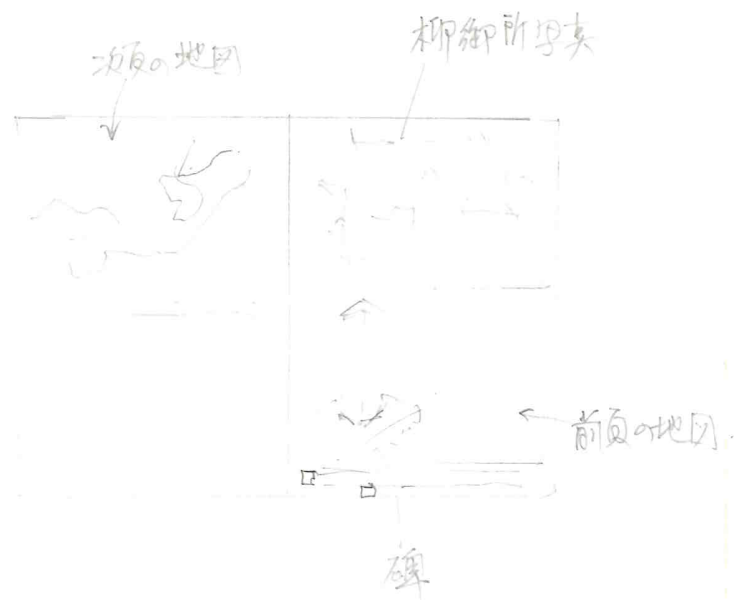
『史蹟』 柳御所 柳御所社務所発行の葉【平成27年4月9日入手】参照(3葉共)

カット
 ↓

・カラー

・右頁下るの左側に
大きく掲載下さい。

4,871^P- 4/5



13Q4

あんとうていりやぎしんじょう
写真図版 759 安徳帝柳御所碑

- ・枠不要。
- ・第二巻(第三章)5頁と同様のカラーにておいて下さい。

4871P-5/5

907P-3/3

- ・限度一杯大きく掲載したい。(頁の上半分)



1424 第517 図 洞海湾(洞海)・房島・関門海峡一帯の地形図(想像)

907P-2/3

1224

・昭和42年4月30日付、国土地理院発行の5万分の1地図「折尾」「小倉」。

・『北九州の旅』北川富志、旅研社、1966年10月発行、71頁。

・『福岡県地名考』梅林孝雄、海鳥社、2003年4月、第3刷発行、78頁 参照

地名辞 903⁹ タリ

ただの
忠度 1351^P
清盛の弟

4,872^P

411.11.27

地名辞 903⁹
大里 903⁹
柳 1591^P
安徳天皇 84^P
長門本 1809^P
甚だ

わすか
僅 2376^P

本(源平盛衰記等)がある。『平家物語』
*なお、平家物語(読み本)には、六巻本(延慶本)・二〇巻本(長門本)・四巻

もつとも、通常、

大里は、内裏の遺跡で、安徳天皇の行宮

があつたところから起つた名である

といわれている。

非常に興味深いことに、長門本平

家物語にこう記されていて注目される。

「豊前國柳といふ所に落ちつき給ふ」

かの處は、地景眺望すこし故ある所なり。桜

梅桃李うゑて九重のけしき思ひ出ければ、さ

つたわたらせ給ふべき御心ありけり。一谷の戦に敗死

忠度(平清盛の弟。歌人。一谷の戦に敗死)

都なる九重の内、恋しくは

柳の御所を立ち寄りて見る

緒方の三郎やがて襲ひ来ると聞えければ、

彼の御所にも僅七ヶ日ぞおはしける

とある。(『帝国地名辞典』太田為三郎、名

著出版、大里へ柳ヶ浦参照)

者達(おおよそ筆者)は、――その昔、柳の地

に日御所(大海人皇子の御所)があつた、

という伝承を知つていたのではなかつたか

そこの甚だ心残りながら、僅七ヶ日しか居

④4851⁷ つか 捕まえる 1476⁷ 改行
 「車口」と書くのはまずい (近内の東だから) 畿内に近江は含ま?
 三関 紀下389⁷ 1241⁷ 不破 地名 393⁷ 地名 616⁷ 紀下 393⁷ 地名 616⁷ 地名 903⁷ 地名 1591⁷
 日本書紀888⁷ 紙一紙 車線 718⁷

うと想像される。と意味なのだろう
 赤旗を軍旗とした平氏の者達は、同じく赤
 色を用いた大海人皇子を慕ったのかも知れない
 市皇子が和藹(和射見)ともいふ不破の郡家(野上)に
 和藹(和射見)があらうと解される
 名辞典「太田為三郎、名著出版へ黒崎」第517図
 東の国への主要な出入口とみなされていた。
 定かでないが、仮りに
 へ(和射見)に相当する(黒崎の関)あた
 りは、(和射見)と称されていた
 と考えてみたい。
 高市皇子は、父大海人皇子にこう報告した
 「昨夜(六月二十六日の夜)、近江へ大軍
 府)の朝廷からの早馬の使がやってまいりま
 したので、伏兵を出して捕えましたところ、

紀下393⁷ ④4851⁷ OK

紀下394³ 31

紀下394⁴ 4,874^P

紀下395⁵

書直ふみのあたひくすりと忍坂直おーさかのあたひおまう大藤おほふじとでございました。

どこへ行ゆのた、と尋たずねますと、

吉野よしのの大皇弟まうけのみみを討うつ為ために、東国とうこく（大和）

の兵へいを要請ようせいしに遣つかわされた韋那公ゐなのきみ磐鉞いはすきの配下はいが

の者ものです。かー磐鉞いはすきは、伏兵ふくへいが現あらわれたの

を見て逃にげ帰かえってまいりました

という答こたえでありました

時ときに大海人皇子おほいあまのみこは、高市皇子たけちのみこに、

近江あふみ（大宰府）の朝廷ちやうていでは、左右さうりやうの大臣だいじんや

智謀ちぼうに左ひだりけた群臣ぐんしんがより集あつまつて計略けいりやくを立たて

ているのに、自分おれには作戦さくせんを相談そうだんする人物じんぶつが

いない。ただ年若としわかい子供こどもがいるだけだ。どう

すべきだと思おもうか

と言いわれた。天武天皇てんむてんかうの皇子みこ中最大年長なかさいねんちやうの高市たけち

皇子みこでさえ、この時とき十九歳さいじゅうと推定すいていされている

ここに、高市皇子たけちのみこは腕うでをまくり、剣つるぎをしつ

かと握にぎりしめ

近江あふみに群臣ぐんしんあろうとも、どうして父上ちちうえの

威靈いれいに逆さからえどかできましようか。父上ちちうえは

お一人ひとりだとおっしやいますか、臣高市みこが、神

々の靈たまに頼たのり、父上ちちうえの命いのちを請うけ、諸將しよしやうを率ひきい

て戦たたかえば、敵てきは我が軍いくさを防ふせぐことなど出来できます

H11.11.27
H9.5.2
H5.10.30(±)⑥
→

こうして 662
攻略 敵地を占領すること
⑥ 697

けしき 696
健康 馬さへい
下394 注6

4875P

まい

と言った。

大御人皇子は、そんな健気な高市皇子を
め、手を携り背を撫でて、

「いっかりやれ、油断するな」

と言われた。そして、乗馬を賜わり、軍事の

こといつさいを高市皇子におまかせになった。

なお、大御人皇子は、近江(大宰府)を攻

略する軍事の全てをいつさいも高市皇子におま

かせになり、自らは、東へ(近畿地

方)からいそいそと来るであろう天智天皇

の軍の襲撃に備えられたのであろう、と想像

される。

軍事一切をまかされた高市皇子は、和豐(国

境の関)へ還っていった。

米

電 欠きた
限なく
行き届かぬ所なく

とと

電 欠きた
とと

「小倉」

電 欠きた
要害の地帯 4870°-1/3 25

4876°

4872°

4882°

野上

393° 18

394°

396°

397°

398°

399°

400°

東の倭国（大和国）の天智上皇が、軍を
整え、いつ襲いかかって来るかは予測し
難いものであつた。しかし、この数
日間はおまの心配は無用であつた。
大和天皇は、野上（柳あたり）に
野上の行宮（不破宮ともいう）を興して
お住まいになつた。（六月二十七日条）
この中大和天皇は、七月二十六日に大友
天皇の頭が宮の前へ献らるまでの一ヶ月も
の長期間、この野上の行宮（不破宮）か
ら動こうとされないのである。（後述）
なお、柳（門司と小倉の間）は、関
門海峡（長豊海峡）の西のはずれに位置して
豊国中津あたりの地形と同様、背
後のろなり状に連なる山（柳の両端が海にせ
まつており、要衝の地となつてゐる）
として、その連山中の高峰戸上山（柳
の背後（東南）に聳える山）五一ハルに登れば
東方の周防灘や、西方の玄海灘の状況
を手に取るように見渡すことができる。
柳（大里）の西北方に平らな引島（彦
山）の沿岸部に

4870°-1/3 25

沿岸部

こうじん 永 功田 151
くてく 635
おに 294
小 林 908
諒 陰 913
警 蹕

続紀③-129P 続紀③-241P
天平宝字 1552
4877P

あなと 穴門 引島 4821P 2行
また 長門 国 竹

鳥が浮かんでおり、北方に對岸の穴門（下関）の狭辺がある。

いうまでもなく、穴門（下関）は、西方へ向かつて半島状に突出してゐる中国地方の先端

部（最西端）に位置してゐる。

なお、門司あたりに本陣を置いたら

恐ろしい結果が予想される。

天智上皇の軍が、企救半島の基部

柳のあたりを占拠した場合、大海人

皇子の本營は、身動きならない孤立状態とな

てしまふからである。（第515回）関門海峡近傍図（全略）

孝謙天皇の

さて、非常に興味深い記事がある。

日本書紀の壬申年の記述中には見えな

い加、続日本紀の天平宝字元年

（七五七）十二月条を見ると、尾治大隅の壬

申年の功に、次のように記されてい

る。

「從五位上尾治宿祢大隅が壬申年の功田

十町。淡海朝諒陰の際（喪に服してゐる時、

大海人皇子は警蹕（先払い）を興し、潜に関東

（豊国の意であらう）

依る小村 77 続紀(録) 3-24P
 上功 5057P 私第 小村 710P
 127P

5057P 4,878P

に出づ。時に大隅参り迎へて導き奉り、私第
 (私宅)を掃清して遂に行宮となし、軍資を
 供助せり。其の功更に重し。大に准すれば及
 はず、中に比すれば余りあり。今に依るに上
 功なり。三世に伝ふべし。
 大隅人皇子が、警蹕(先払い)として村
 国連男依らる不破(長豊海峡)の方へ遣わし
 その後を追って関東(豊国)へ出られた時、
 大隅は、当初から大海人皇子方に
 つこうと決意し、参り迎えて導き奉り、野上
 の私宅を掃清して野上行宮(不破宮)
 となし、軍資を供助した
 と理解される
 大隅の所領は、尾治宿祢大隅と改められた
 大隅の名も、尾治宿祢大隅と改められた
 のであらう、
 と想像される。
 考えてみるに、大海人皇子挙兵の時

新経66

123

5057P 58P

4,879^P (こ)

こうてん
功田 751^P

4,879^P

4836^P

三宅が迎える

(ここに大隅の名はない)

ーーー、もしも大隅か、近江(大友天皇)方に
ついたといたら、一体どういうことになった
だろうか。

■ そんなにも容易に関門海峡(長豊海峡)
をおさえることは出来なかったであらうし、
その後の戦局も大きく違ったものになってい
た。あ、うー、と思われる。

■ まことに、曰大隅の其の功は実に重く、
曰上功とすることにふさわしい。
■ そこで、壬申年の功田四十町が、三世に迄

も伝えられることになったのであらう。(「伝
辞苑」ハ功田参照)

*